

## 東海テレビ 公開検証 本社サブと現場を ST 2110/danteベースで ダークファイバ接続

東海テレビ(THK)技術局は、8月18日に「映像・音声・制御・タリー・インカムのすべての信号を本社制作サブからドライブして中京競馬場の中継番組を制作」という狙いの実験プロジェクトを実施した。そこには関心を持つ他局の技術メンバーも集まった。

技術局映像制作部・渡部克弥主査によると、実験プロジェクトのコンセプトは「機器をつなぐだけで中継先をスタジオ化する」で、出先にIP機器をアドオンするだけで中継車の機能を本社のサブ機能に持たせるという大胆な発想だ。

ダークファイバを使い、映像ST 2110と音声dante、制御信号を同時に一芯のファイバで伝送した。その共存のカギはWDM(波長分割多重)で、波長の異なる複数の光信号を多重して伝送する通信技術にあった。実験構成は、THK制作サブと中京競馬場の間を1芯のダークファイバでつなぎ、オペレーションルームに見立てた会議室にスイッチャーパネル、EVSリモコン、CG送出コンソールを設置してオペレーションを行った。さらに、品質評価ルームを別の会議室に用意し、見学者が各IP GW素材の画質と遅延などの比較や、各機器の設定UIに触れることができるようにした。

また、インターネット回線でIPインカムシステムの構築と、伝送品質・機能比較のためソニーの低遅延伝送装置で競馬場カメラSDI信号を伝送した。

本社制作サブではVEが色調整、IRISコントロール、カラ



技術局映像制作部・渡部克弥主査(写真左端)が見学メンバーにシステム構成を説明

コレ、機器設定を行い、インカム対応と音声担当がミキシング、音声収録などを担当した。

中京競馬場の中継車はCCUの機能だけを使用。機材車をIP増設機器の設置用に配置し、WDM装置や現場LEAFスイッチなどを搭載。競馬場の放送席で各種音声信号をdanteに変換、現場カメラマンは通常の競馬中継として対応し、必要なリターン/タリー/制御/インカムの信号は本社で操作した。

会議室からのリモートオペレーションを担当した映像制作部・溝口英則マネージャーは「生中継では一瞬のタイミングが重要になりますが、少しの違和感もなくできました。前日にプロ野球の中継、今朝は競馬中継というようなスケジュールの場合、機動力を大いに発揮できます」と運用のポイントを話す。

朝8時からの最終調整段階から公開し、当日準備のドタバタぶりもすべてを見せるオープンな姿勢は見学者たちを大いに刺激したようで、渡部主査や溝口マネージャー、協力のメーカー担当者と話し込む姿は単なる見学会とは違っていた。

IP設定の裏側を現場取材している中で、システム開発ではアジャイルという手法が重視されているが、実用のIP機器設定もアジャイル的に公開した今回の成果は、このアプローチ自体が一つのステップを刻んだ印象であった。度胸ある挑戦だった。



IP技術実用において一つのステップを刻んだ2024年8月18日の東海テレビの実証。その現場に立ち会った見学者、協力メーカーメンバー、そして東海テレビの皆さん